アルチュール・ランボー小論

「二」労働する存在・沈黙する存在・反抗する存在

井本元義

「一」はじめに

今日世界中で数千を越えて存在するアルチュール・ランボーに関する書物に僕が一筆を加えようと思うのはおこがましい事ではある。しかし彼の生き方の底に流れる不思議な源流に、手を差し込んでしまった僕は、少しでもその印を残しておきたい気持ちを抑える事はできない。学術専門的な勉強をしたわけではないが、僕の目に射し込む言葉、彼の詩に現れまた隠された真実と苦しみを、ただ看過することはできず、一文を示したい。

カミュは「形而上的反抗」の中で、腹巻に八キロもの金貨を隠したランボーを、神話的英雄として多くの若者に推奨できようか、と言いながらも、こう語っている。

「僕は不幸だ、なんて不幸なんだ・・・金を身につけながら
その番をすることもできない・・・いやだ、今こそ僕は
死に反抗する・・・」

「この惨めなランボーの絶叫が幸いにも彼を偉大さと無意識に一致する領域に戻す。深淵を前にして、若き日の彼、生の呪詛が死の絶望に過ぎなかったころの反抗が蘇る。我々の熟愛した、苦悩に引き裂かれた青年に戻る。最後の恐怖と苦悩のうちに青年に戻る。ここに初めて彼の情熱と眞實が始まる。」

「カミュ」

これがランボーの生涯の全てを語っているのは周知のことだ。カミュはランボーを知った故に、不条理の哲学にたどり着いたと言っても過言ではない。それ以上の説明は不要だ。それで僕はここに至るランボーの生涯の証である詩を僕なりに読んでいきたいと思う。

四十五年にわたる事業の世界から足を洗った時、僕はすでに老人になっていた。振り返るとそこは水を求めてさ迷った酷熱の砂漠であり恐怖の夜の砂漠であった。または泥濘に足を取られながら気づかないうちに底なし沼に誘い込まれよう

とする瞬間の連続だった。そんな日々で、やっと手にして生き永らえた一滴の水は、また沼へ吸い込まれる寸前に手にした板切れは読書であった。古今東西の古典に浸ることは、生きるに必要な睡眠であり食事であり性であった。

いつの頃からだったろうか。アルチュール・ランボーが僕の胸に棲みついて離れなくなったのは。原色の渦のように氾濫する言葉と、襤褸を纏って裏町を徘徊する美少年、未知の都市や危険な大海や山岳を放浪する彼。そして文学では何も語らなくなったまま、アフリカの闇に消えて行った彼。

「二」ランボー家

アルチュールの祖父はロッシュ村の農民で畑をもった働き者だった。妻を亡くしたが再婚せずに働くばかりだったが、十六歳になった娘のヴィタリーがとって変わって主婦になり、また働き手として一家の中心になった。彼女は生真面目で倹約家で敬虔なクリスチャンだった。

ある時期、農場を息子に任せて彼は娘のヴィタリーとシャルルビルに家を借りる。農繁期には帰るにしろ都会の生活もよかったらしい。都会といっても周りの農民を入れて一万そこそこだ。隣のメジエールはベルギー国境の要塞都市だった。

ある夏の夕べ、駅前の公園の音楽会でヴィタリーはランボー大尉と知り合い結婚する。二十七歳の晩婚だった。しかし決して平凡な幸せな家庭ではなかった。大尉は数日滞在するとまた次の駐屯地へ赴任する。短い滞在であったが、その都度ヴィタリーは妊娠しアルチュールを含む五人の子供を産む。一人はすぐに死ぬ。

子供が多いという理由で、家を追い出されたヴィタリーは裏通りに引っ越す。そこは下層労働者たちが住む貧しい地区だった。近くには鉄釘工場や鞣革工場があり澱んだ空気が満ちた通りだった。劣悪な家に夫の大尉は帰ってきても妻とはうまくいかなくなり、アルチュールが五歳の時に家を出てそれから二度と戻らなかった。

気丈な彼女は子供を一人で育て、うまく行かなくなったロッシュ農場を取り仕切り、相変わらず厳格な女性のままである。

子供たちを並ばせ列を組んで、日曜日の教会のミサに通う。我儘な子供たちには平手打ちも厭わない。愛情が深いゆえに厳しい母親である。

一週間を決められたとおりにコツコツと働き、日曜日には教会でお説教を聞く。多感な少年が反抗するには十分すぎる。しかしそれが人間の虚しいけれど生きる真実だ、と彼は天性の肌感覚で身にしみて感じる。それが人間の存在なのだ、と。しかし汗と油にまみれて日々を労働に費やすなど自分の未来に考えられようか。その存在を与えてくれた神、教会に反抗こそすれ感謝など考えられない。悪臭のブルボン街の労働者たち。ロッシュ村の汗だくの農民たち。しかし紛れもなくそ

れは真実なのだ。
世には数多の詩集なるものが出版されている。アルチュール・ランボーの詩集は二冊だけである。「一冊は当時は未刊」その中で僕は「労働」あるいはそれに関する言葉をたくさん発見した。労働運動を主体とした詩集ではそうだろうが、ほかの詩人の詩集ではありえない。
労働こそが空しく生きる証だ。刻々と過ぎる時間を食ってただ人間は存在している。日曜日ごとに教会へ行って、その虚しさが解消されるのだろうか。そんなはずはない。宗教と聖職者のために自由を捨てた貧しい者たち、という詩を後に書いている。ただ無感覚になるしかない。俺は嫌だ、彼の無意識の叫びがきこえる。彼は反抗する。何に対してか。神か教会か。いや彼が反抗するのは、そうやって与えられた「存在」そのものなのだ。それが自己の存在への反抗であり否定であれば、そのまま破滅の道しか残らないのではないか。
結論を先に示すことになるが、彼のこの感覚が彼の生涯の苦しみであり。真実と知っているからこそ彼の一生を縛る。
僕はこの文章で、彼の「労働」と「存在」に関する言葉、およびそれを喚起させる「言葉」を詩や手紙から抜き出して、その時代の彼の感覚を味わい魂の遍歴を追っていきたい。
彼の詩や手紙には様々な切り口で、人間の真実を見極めようとするあらゆる表現が美しい言葉で綴られているが、ここでは働くこと、決められたことをコツコツとこなす日々の「言葉」のみを取りあげる。

「三」初期の詩　シャルルビル

まずその出発となる一八七〇年、彼の十五歳の時に清書された数篇の詩は素通りできない。処女作とされる「孤児たちのお年玉」および「感覚」「オフィーリア」など、十五、六歳の少年の天才に驚くばかりである。規則正しい音節、韻を揃え、百行以上の詩を書きなぐる。
「存在」と不在の詩として「孤児たちのお年玉」がある。詩では暖かな暖炉の前で、子供は沢山のプレゼントをもらって喜んでいる。しかしそこには母親はいない。父は遠くにいる。一見悲しそうな言葉を吐きながら、本心は悲しいのではなく、プレゼントをもらって嬉しいのに、反面、母の不在を望んでいるがごとくである。まるでそれからの解放を味わっている。優しい母親の微笑を数行で描きながらも、母親、厳しい仕事、教会、それらはもう遠くに去っていった、と言わんばかりだ。
「ああ！なんてすばらしい朝だったたか、あのお年玉の朝は！
・・・・・・・・・・・・・・

家にはもう母親はいない！　それに父親もうんと遠くだ！」

「孤児たちのお年玉」

この時アルチュールは十年前の父親しか知らない。顔の記憶はなくかすかな思い出しかない。彼は知らない遠い街に去っていった。ボヘミアンのごとく自由に、青年のような足取りで。父親に関して書かれているはこの一行だけだ。

「夏の青い夕暮れには　山の小道を行こう
・・・・・・・・・・・・
ものを言うまい　なにも考えるまい」

「サンサシオン」

束縛を軽く振り払って、自由に飛び立った父親が青年になって、夢み心地で、アルチュールの前を歩いていく。彼もまた、見知らぬ世界へ歩いていく。

「星たちが眠る暗く静かな水面を
白いオフィーリアが大輪の百合のように流れていく」

「オフィーリア」

それは千年以上になる、亡霊さながら、である。アルチュールは異国への憧れを抱きながら、オフィーリアの存在しないような「存在」を心の奥に住み込ませているのだ。運命付けられた「存在」ではなく、束縛されてから認識する「存在」ではなく美の「存在」として。この静かな「存在」が彼の反抗の爆発の原点であるだろう。

「太陽と肉体」は実に二百行に渡る力強い詩である。音節も韻も完全にこなし、あらゆる言葉が爆発する。古代希臘文明への回帰を賛美しながら、個々の人間の肉体の「存在」を歌い上げている。そこには束縛も義務もない存在、愛と美に満ちた輝き渡る肉体の存在があり解放された肉体、個々の「存在」は躍動する。

「大いなる空は開かれ　立ち尽くして
広漠として輝き渡る豊かな自然のなかで
力強くその両腕を組む人間の前で　神秘は死に絶えた
人間は歌う・・・森は歌い、大河は囁く
太陽に向かって伸びあがる幸せに満ちた歌を
これこそは償いだ　愛だ、愛なのだ
・・・・・・・・・・
おお、肉体の輝き　理想の輝きよ」

「太陽と肉体」

これらはパリにいる先輩詩人たちへ対して己の才能を誇示し、彼等の驚愕を想像しながら、また半分は彼等への反抗も

含んで、力を込めて書いて送った詩である。高踏派の大御所の、テオドール・ド・バンヴィルあてである。

しかし彼自身の感動は本物であるが、わずかこの三年後に地獄を一季節をかけて巡ることになるとは、思いもしなかっただろう。いや、彼にはその予感が既にあったのではないか。「存在」が決して輝きに満ちたものではないことを。

神の庇護する日々の生活、「労働者」としての「存在」を拒否することは教会、聖職者への皮肉や反抗になって彼の詩は爆発する。また国家を下支えする労働者としての存在は権力者への皮肉と抵抗と反逆になる。権威を着た小役人へはグロテスクな詩で侮蔑する。

「黄色くくすんだ顔で、歯の抜けた口から新人の涎を垂らして」

「タルチェフ懲罰」

「鍛冶屋は太っちょのルイ十六世に向かって言った
・・・・・・・・・・・
労働者の群れが続々と街中につめかける
ハンマーを肩に担ぎどす黒く汚れた風体でパリを歩き回る
・・・・・・・・・・・・
俺たちは労働者だ　陛下　労働者なんだ
俺たちは偉大な新しい時代を託されている
・・・・・・・・・・
知らないでいることこそがたぶんこわいことなのだ
・・・・・・・・・・
空を見るがいい　俺は群衆の中に戻る
あの偉大なる賤民たちの中に」

「鍛冶屋」

ただ怒りをぶつけるだけでなく、音節、韻を揃えた皮肉たっぷりの二百行の美しい響きの詩である。

小役人として存在する労働者たる図書館の司書が権威をひけらかすと、アルチュールの腐肉に罵倒される。

「できもので皮膚が黒ずみ　あばた面　目の周りは隈取
瘤だらけのねじ曲がった指は大腿骨でひきつり
・・・・・・・・・
まるで古壁に蔓延する皮膚病の花ざかりだ」

「座っている奴ら」

だが、やはり少年アルチュール・ランボーは詩人である。未知の自然や街や空想を想いそれに耽る。放浪でありファンタジーであり優しい女性たちである。数篇の詩がある。最初の「サンサシオン」のイメージが次々に広がり、知ら

ない街を歩きながら、口は言葉の韻を楽しむ。

「十七歳ともなれば真面目一筋ではいられない・・六月の心地よい夕べに菩提樹は素敵に匂う・・・ブドウの香りとビールの香り・・・君はすっかり恋のとりこ、八月までは・・・冬になったら小さな薔薇色の客車にのって出かけよう・・・小さな声が言う、ねえ触ってみて、ほっぺがこんなに冷たいのよ・・・。」

「いくつかの詩の断片から」

何度繰り返しても飽きることはない。彼の「存在」は自由だ。

時は熟した。己の才能と素晴らしい詩を憧れのパリで叫びたい。高踏派詩人たちを驚かせたい。彼は学校はそのままにしてパリへ何度も家出する。最初の家出は十五歳である。しかし運賃不足で留置所に入れられたり連れ戻されたり、ゆっくりパリを味わうどころではない。ゴミ箱を漁って飢えをしのぎ、当てもなく彷徨い、野宿したり乞食女に世話になったりする。それでも詩を書き本を盗んでは読んで返す。

少しも不安ではない。

俺は義務を負った労働者として位置づけられようとしていたのだ。そんな自分とはっきり断絶する。俺は常に自己否定し、新たな変貌を遂げる。俺は自由なのだ。自由な浮浪詩人、自由な労働者だ。

懐かしく振り返ることも厭わない。

「さてそこで母親は義務の書を閉じ
満足そうに威張り腐って立ち去った
青い目の中や秀でたおでこの奥で
息子の魂が嫌悪にまみれていることも知らず
一日中彼は服従の汗を流していた
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
可哀そうに親しくしている子供たちといえば
虚弱で帽子も被らず頬にまで目やにをこびりつかせ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
隣に住む労働者の娘はいかれたお転婆小娘で
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
彼は組み伏せられながらそのお尻に噛みついた
その娘はズロースなんかはいたことはなかった」

「七歳の詩人たち」

それでも仕事をする人間のイメージは彼の脳裏に棲みついている。

「仕事に打ち込む錬金術師の広い額に刻まれた皺の安らぎ」

「母音」

しかしその都度連れ戻された少年アルチュールは、それでもパリコミューンの布告を聞くや、心は踊る。シャルルビルで友人などの前で演説する。

「秩序は打ち負かされたのだ。民衆は自由とパンのために蜂起した。明日にも勝利は彼らのものになろう。すべての労働者は皆連帯し合っているのだから、立ち上がらねばならない。」

反抗者、反逆者たることは彼の信念である。そのために彼は労働をしなくても、権力体制に刃向かう労働者なのだ。駅前で汽車を降りてくる人をつかまえては、パリの状況を聞く。そして恩師あての手紙にこう書いている。

「僕はいずれ労働者になります。狂ったような憤怒が僕をパリの戦闘へと急き立てる時、かの地で多数の労働者が死んでいるのです。」

「恩師イザンバールへの手紙」

「四」パリコミューンとその日々

マロニエの花の盛りの四月、彼はついに北の城門からパリに入り、パリコミューンに参加する。プロシャ軍に破れたフランス政府軍に代わって、市民と労働者による共同体を作る流れは勢いがあった。その兵士の一員として、下層階級の労働者として戦闘に参加しようとする。プチブルジョア、市民階級の息子である彼が思い切ってそこへ身を投じるのは、さらなる解放を求めていたのだ。

彼は自由なる労働者として自分を位置付ける。一説によると共産主義に関する文章も書いていたらしい。

彼はコミューンのバリケードで働く女性たちを賛美する。

「恋するこの手の輝きが
雌羊たちの頭を回転させるのだ
その風味のある指骨に
偉大な太陽がルビーをはめるのだ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・
この素晴らしい手は青ざめた
愛に満ちた大いなる太陽に照らされて
機関銃のブロンズの上で
反乱するパリのいたるところで」

「ジャンヌ・マリの手」

しかし実際は、酒と煙草の匂いに満ちた無秩序な兵隊との共同生活に彼は失望する。それどころか屈強な荒くれ男たちに手ひどい凌辱を受ける。彼はコミューン崩壊の前にシャルルビルへ逃げ帰る。

「僕の哀れな心臓は船尾で涎を垂らす
安煙草で一杯の僕の心臓
奴らはそれにスープのげろを吐きかける
僕の哀れな心臓は船尾で涎を垂らす
いっせいにどっと笑う
兵士たちの嘲弄をあびて」

「盗まれた心臓」

だが彼は深くパリを愛している。

「憤怒に駆られたお前の足があんなに激しく踊り狂ったのにパリよ、お前は短刀による襲撃をあんなにしばしば受けたのに　お前のその明るい瞳に鹿子色した春の優しさを　ほんの少しだけ映しとどめて　お前は倒れ伏したのに」

「巴里の乱痴気騒ぎ」

シャルルビルに逃げ帰ったアルチュール・ランボーは大きく変貌する。

恩師への手紙に書いた「見者」は新しいランボーの姿だ。

「今のところ、放蕩の限りを尽くしています。僕は詩人になりたいのです。そして「見者」になろうとしています。説明には苦しみます。あらゆる感覚を放埒奔放に解放することによって未知のものに到達することが必要なのです。苦悩は大変なものですが、強くあらねばならず詩人として生まれ変わるのでなければなりません。僕は自分を詩人として確認しました。われ思う、なんというのは誤りです。人が私を考えるべきでしょう。「我」とは一個の他者なのです。」

「恩師イザンバールへの手紙」一八七一年

彼は自分を詩人と確定することによって、他者から決められた「存在」を否定し、それから己を解放する。己の存在を他者の眼で見なければならない。

聖職者や権威者には相変わらず激しい怒りをぶつける。それどころか、彼の皮肉や怒りは貧しい人々、宗教と聖職者のために自由を捨ててしまった貧しい人々にも襲いかかる。日々の過酷な「労働」に身を費やし、宗教の前でただ「存在」することだけで満足なのか。

「そしていずれも乞食めいた愚かな信仰を涎のように垂れ流し
イエス様に際限もない泣き言を並べてみせるのだが
イエス様は鉛色のステンドグラスに黄ばんで夢みておいでだ
邪悪な心を抱いたやせっぽちや根性曲がりの太鼓腹も」

「教会の貧者たち」

「いかにもこれは愚かしい　こんな村の教会で

十五人もの醜いガキどもが　柱を垢で汚しながら
耳を傾けている　蒸れて発酵する臭い靴を履いた
グロテスクな黒ずくめの男が喉を鳴らして話す神秘なお
喋り
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
キリストよ　おおキリストよ　活力を奪う永遠の盗人よ」

「初聖体拝領」

ランボーにとって、己の情熱の発露は詩である。それが彼の存在の原点だ。パリには高踏派の詩人たちが今なお高くとまっている。大御所は、テオドール・ド・バンヴィル。ランボーは彼に向けて詩や手紙を送り続ける。どうだ、参ったか、と言わんばかりである。伝統的な詩をこれほど書ける詩人はいないだろう。しかも自分は十八歳だ。「一歳上乗せしているが。」

ついに名作が生まれる。それはパリに届けられる。

小麦や綿花を運ぶ老船は大河をくだり大海原へ出て行き、舵と錨も失って漂流する。

「青海原がいきなり染め上げられて
太陽の紅の輝きのもとで錯乱しかつ緩やかに身をゆすり
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
俺は知っている　稲妻に引き裂かれる空　そして竜巻
砕け散る波と潮の流れを　俺は知っている
夕暮れを一群の鳩のように高揚して舞い上がる暁を
俺は見た　神秘の恐怖に染みをつけられた太陽が
菫色の長い凝固の連なりを照らしているのを
そしてまた古代史を彩る立役者たちのように
大波がはるか遠くで鎧戸の戦きを転がしているのを
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
俺は夢に見た　眩惑された雪が舞う緑の夜
ゆるやかに海の瞳へと湧き上がる接吻を
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
べた凪のただ中で海水が崩れ落ちるのを
そして遥かな遠景が滝となって深淵へと雪崩れていくのを
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
暁は胸をえぐり　月なべて無惨に　日なべて苦し
刺激のきつい愛が俺の全身を陶酔のうちに麻痺させた
おお　竜骨よ　砕け散れ　おお　われは海に果てん」

「酔いどれ船」

漂流に身を任せた老船は、嵐の海、朝の黎明、様々な幻想に酔ったまま、暗黒の虚無の奈落へと沈む。

四行の二十五連の十二音節と韻の伝統的な詩である。まだ十七歳にならない少年ランボーの天才ぶりがうかがえる。パリの連中に見せてやると意気軒高である。誰でも俺の詩にたちまち感動せざるを得ないだろう。俺は直ちに成功を収め、名声を獲得するのは間違いない。

詩を読んだヴェルレーヌがランボーをパリに呼ぶ。来たれ、偉大なる魂よ。

「四」ヴェルレーヌとの出会い

ここからランボーとヴェルレーヌのパリでの放浪が始まる。またパリを離れベルギー、ロンドン、などを彷徨いながら彼らは詩を書き続ける。彼らの物語は誰でも知っている破天荒なものであり、情熱にあふれた若者の無頼に満ちている。ヴェルレーヌにとっては至福の詩の時代であり、また破滅の始まりだった。

その頃の彼の詩は後期韻文詩といわれる、従来の高踏派、旧体制に反抗する詩である。伝統的な十二音節を捨て、韻を捨て従来のものを壊し新しいエネルギーを燃やす。制約されない詩が「存在」そのものだ。

だが、己が感動する詩、解放される詩はまだ見つからない。

そこにはもう「労働」という言葉は以前とは全く意味に違う言葉になっている。たとえば、「労働者」という言葉を手紙に見つけることができても、それはもはや昔のような義務束縛服従者としての侮蔑の言葉ではない。彼は懐かしい優しい眼でその労働者という言葉を書く。彼は真夜中から朝までホテルの部屋で詩を書く。

「窓は学校の庭に面して、亭々たる大木がある。午前三時、蝋燭の光が蒼ざめる。鳥という鳥が一斉に樹間で囀る。おしまいだ。仕事なんか手につかない。あさぼらけの得も言われぬ時に魅せられて、僕はただもう木々や空にながめいるほかない。すると早くも大通りの方で荷車のがらがらと良く響く快い音。五時にパンを買いに降りていく。いつもそうだ。労働者たちがいたるところぞろぞろ歩いている。僕にとっては酒場で酔っ払う時刻だ。帰ってきて飯を食い、七時に寝る。太陽が屋根瓦の下からワラジムシを這い出させる頃だ。夏の曙，そして十二月の夕、これこそ僕の心を捉えてやまないものなのだ。」

「友人ドラエーへの手紙」

小役人であるヴェルレーヌを役所からまた家庭から解放させ、ランボーの魅力で破滅に近づけながら、ランボーもまた何と戦って己を解放させようとしていたのか。高踏派詩人たちを愚弄し、自分を誇示しながら旧来の詩を破壊しようとするも、もう一つ燃えあがる詩情の坩堝に身を投げることができない。彼等の権威は脆い、反抗するに値しない。権力に刃向かい、そこに縛られている存在を解放すべき「見者」になろうにも、それだけの権力は存在しないし、己の「存在」がまだ掴めない。

二人はワインの沼に溺れかけながら、破廉恥な旅を繰り返し数少ない詩を書く。

「彼はもはや自分の悪徳を誇示したり、反抗を宣言したりしようとは思わない」とある評論家が言う。
ランボーは甘美な憂鬱感を帯びた簡素な悲しみを書いたりする。

「むなしい青春
すべてに服従
優しさゆえに僕は生涯をだめにした
ああ、時よ来い　愛に燃え合う心の時よ」
「高い塔の歌」

「季節ごとにこの身がすりへればいい
自然よ、この身を君にまかす
我が飢えも我が乾きも一切を」
「五月の軍旗」

「夏の朝の午前四時　愛の眠りはまだ覚めない
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
あちらの広い仕事場では
大工たちがシャツ一枚ですでに立ち働いている
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
ああ、この素敵な職人たち　」
「朝の良き思い」

「どこかの古めかしい町で
静かに杯を傾けて　それから
前よりも満ち足りた思い出死んで行く
そんな夕べが僕を待っているかもしれない
僕は我慢強いから」
「あわれな夢」

「見捨てられた川沿いの作業場の歓喜
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
年老いた一人の浚渫夫が不動の小舟で難渋している」
「記憶」

「あいつの侮蔑を浴びるのなら　ああ
すみやかにいまわの際に導くがいい」
「季節よ城よ」

相変わらず労働者が出て来るが、静かに見守り親しみを覚える。もう忍従し労働に制約され自由を失った愚か者ではない。

破廉恥な二つの魂は放浪の末に火花をちらす。一八七三年、けだるい夏の午後のブリュッセルに銃弾が響く。酔ったまま泣き崩れるヴェルレーヌ、痛みで唸るランボー、二人は惨めな姿で逃避行を終える。

「見者」として己の存在の解放を客観的に見ようとするが、どうしてもまだ他者としての自分を発見できない。ヴェルレーヌと喧嘩し和解しそして再びぶつかり合う。軽薄な時間はワインの波に流されてしまった。悶々としながら、左手首の弾丸摘出のため入院を余儀なくされる。

「五」ロッシュ村へ帰省

入院の十日間が終わると彼はロッシュ村の家族のもとへ帰る。自責の念はもとより、彼は身も心も傷ついたままだ。

彼は「地獄の季節」を書き始める。しかし再び天才詩人として立ち上がったのではない。彼は自らを地獄へ叩き込む。原点へ帰り、もう一度自分を見つめなおす。己の「存在」を地獄の四季へ放浪させる。自由に放浪しながらその「存在」が戦ってきたのが何かを追求する。

ヴェルレーヌは牢獄に、自分はロッシュ村という牢獄に帰ってきた。というのも、今や刈入れ時で、家族は総出で一日中、農作業である。俺は農作業などするものか。しかし帰るところはここしかない。

兄のフレデリックはシャツ一枚でいつまでも熊手を動かし、母親は疲れを知らぬがごとく麦束を集めている。妹たちも一日中仕事である。

アルチュールは納屋の二階に陣取って手伝おうともしない。呻き声、嗚咽、怒号が天井を通して下まで響いてくる。足を踏み鳴らす荒れ狂った音はもっと激しい。そうして「地獄の季節」を書き続ける。

夕方家族が労働に疲れて帰ってくるところへ、アルチュールは熱に浮かされたような顔をして現れる。家族はそんな彼を非難することもできない。

「およそ職業と名のつくものは、ことごとく嫌いだ。支配者も労働者もみんな百姓だ。下劣なものだ。ペンを持つ手も鍬を持つ手も似たり寄ったりだ。―なんという手ばかり幅を効かす世紀だろう。俺は決して鍬など持つまい。そんなことをすれば奉公人の身分には際限がない。乞食の真っ正直さには聞くも涙だ。犯罪者は去勢された奴と同じく胸糞が悪くなる。最も俺は無傷のままだが。

・・・・・・・・・・・・・・・

俺は戻ってくるだろう、鉄の四肢、褐色の肌、猛々しい目つきをして、その面魂を見て、人々は俺を見て屈強な種族の一人とみなすだろう。俺は黄金を手に入れるだろう。

・・・・・・・・・・・・・・・

生活は労働によって花開くとは古くからの真理だ。ところが俺の生活は十分な重みがなく、舞い上がって漂っている。世界のあの貴重な支店である行動のはるかな上空を。死を愛する勇気も失せたとは、なんともはや老嬢めいてしまった。」

「悪い血」

「人間の労働！それこそは俺の深淵をときおり照らし出す炸裂だ。

・・・・・・・・・・・・・・

俺には何ができるだろうか？労働というのもがなんであるか心得ている。それに科学の歩みはあまりにのろい。

・・・・・・・・・・・・・・

いや違う！俺は今死に反抗しているのだ！労働などは俺の自尊心を満たすのにはとるに足らない。」

「閃光」

「この俺！あらゆる道徳を免除された、道士とも天使とも自認したこの俺が、果たすべき義務を探し求め、ざらざらした現実を抱きしめるべく土に戻されるのだ！百姓だ！」

「別れ」

ここでは、詩集の中から「労働」に関する言葉だけを抜き出しているが、詩には他に爆発するような美しい原色の言葉があふれ出ている。

　彼は地獄の中を雄叫びを上げながら闊歩する。もはや労働するものとしての「存在」やそれを強いる神への苛立ちなど消えてしまった。労働そのものを見つめ、霧のようにわが身に纏いつく空虚な水の流れを全身で払いのけ、自らの苦悩を吐き出す。

　宗教に対しても昔のような愚かな聖職者への風刺や権威に対する反抗や罵倒は影を潜めた。地獄の中では宗教はサタンが味方だ。

「俺は多量の毒を一気に飲み干した。はらわたが焼けこげる。毒の激しさが手足を捻じり、この身を変形させ地上に打ちたおす。喉が渇いて死にそうだ。息が詰まる、叫ぶこともできぬ。これぞ地獄だ。永遠の刑罰だ。見ろ、勢いを盛り返した炎がなんとよく立ち上ることか。俺は十分焼け焦げる。そうではないか、サタンよ。

俺は垣間見ていたのだった。善と幸福への回心、つまり救済を。この俺にそんな幻想を描いて見せられようか。地獄の頌歌などは許容しないのだ。

・・・・・・・・・・・・・・

なんと地獄堕ちの刑は永遠に続くものであることか。われとわが身を切り刻もうなどと考える人間は立派な地獄落ちだ。われ地獄にあり。俺は自分が受けた洗礼の奴隷なのだ。両親よ、あなた方は俺の不幸を作り、かつあなた方自身の不幸を作った。

・・・・・・・・・・・・・・

労働者たちよ！俺は祈りなど求めはしない。ただお前たちの信頼さえあれば、それで充分なのだ。

・・・・・・・・・・・・・・
いずれそのうちに地獄堕ちの悦楽はさらに深まるだろう。何か罪を犯すのだ。さあ早く。人間の法により、俺が虚無へと落ちていくために。
・・・・・・・・・・・・・・
炎が地獄堕ちのものを包んで再び高く舞い上がる。」

「地獄の夜」

地獄の中で彼は宗教に対して戦いを挑む。ここではそれが許される。多量の毒、それは、たとえばキリスト教信仰である。人間は救済を求めるが、かえって地獄の業火に焼き尽くされる。

詩の部分を引用してもあまり意味はないが、彼の沈痛な叫びは聞こえる。「労働」を神から解放し、その神へは、自らの地獄からの戦いで勝ちとった破滅で復讐する。それが現世界では「存在」の尊厳である。

そして四季は巡る。

「俺は沈黙や夜を書き記した。言葉で言い表せないものを書き留めた。そして眩暈を定着した。
・・・・・・・・・・
それから春が、白痴のぞっとする笑いを俺にもたらした。
・・・・・・・・・・
海の熱風が俺の肺を焦がすだろう。
・・・・・・・・・・・・・・
すでに秋、しかしなにゆえに永遠の太陽を惜しむのか
・・・・・・・・・・・
そして冬を怖れる。なぜならそれは慰安の季節だからだ！
・・・・・・・・・・・・
そうだ、新しい時は少なくとも極めて厳しいものだ。というのも、今や勝利がこの手中に収められたと言いうるからだ。歯ぎしりの音、炎のめらめら燃える音、悪臭を放つ溜息はみな治まる。薄汚い思い出もすべて消える。俺の最後の未練も退散する。乞食や強盗や死の友、地獄堕ちの者どもよ、俺に仕返しができるか。」

「悪い血」

「けれども、今日となっては俺は自分の地獄について語り終えたと思っている。いかにも地獄だった。人の子イエスが扉を開けた。あの昔ながらの地獄だった。
・・・・・・・・・
同じ砂漠から、同じ夜に、いつも俺の疲れた眼は銀色の輝きに目覚める。いつもそうなのだ。一体俺たちは行くのだろうか。砂浜や山々を越えて、新しい労働の生誕を、新しい叡知を暴君と悪魔の退散を、そして迷信の終焉を喜びに変え―そしてこの地上における降誕を―一番乗りで―礼拝しに！天上の歌声、民衆の歩み！奴隷たちよ、

この生を呪うまい。」

「朝」

地獄に落ちた自分が下層の人間や黒人になって仮面をかぶり、苦しみ悶え泣き叫ぶ姿を描きながら、それを筆者が見ている。

悪夢は去った。目覚めた彼は地獄を脱出したのか。いや白々と明けていく朝の光の先に、彼は再び地獄が入口を開けて待っているのを知る。だがもう幻想の世界で戦う意味があるのか。

いまや初めて神から与えられた使命の労働から解放された存在が認められる。意味なく生きる事、日々の営み、それを労働と呼ぶなら、尊厳としての己の存在、その勝利である。新たな地獄をなんぞ恐れることがあろう。勝利した己は確実な一歩一歩でそこへ進んで行くことができる。

「とはいえ、今は前夜だ。生気と本物の優しさの流入は、ことごとく受け入れよう。そして暁には熱い忍耐の鎧で武装して、俺たちは新しい都市に入城するのだ。

・・・・・・・・・・・

そしていずれ俺には、一つの魂と一つの肉体のうちに真実を所有することが許されるだろう。」

「別れ」

カミュの「不条理」の理念はこの詩集から得られたと僕は確信する。ただこの小詩論だけからそれを証明するには力不足だ。詩集を深く読み解かねばならない。

最後に、この詩集「地獄の季節」には、次にまだ意識していない不安が覗き始めているのも見逃せない。

「まだほんの子供だったころ、俺は何度でも牢獄に舞い戻ってくる強情一徹な徒刑囚を感嘆して見つめたものだ。彼の滞在によってなにやら神聖なものとなった旅館や木賃宿をあちこち訪ねてまわった。青空や田園に花開いた労働を、彼の思いをもって眺めもした。都会から都会へと彼の宿命の匂いを嗅いでまわった。」

「悪い血」

ならず者、徒刑囚はまた牢獄では一つの労働者である。架空の宗教とは違う物質的な力のある権力がそこに立ちはだかる。放浪者ならず者罪人にもともと存在の必要を国が認めるのか。己自信もそれを欲求するのか。

それは現実問題として、国では兵役の義務がある。これは有無を言わせない力がある。新たな「労働」だ。それはまた存在するための「労働」でもない。彼はこの詩の最後に叫ぶ。

「もうたくさんだ！見ろ懲罰が下る。いざ進め！ああ！肺腑

が焼け、こめかみが割れんばかりに鳴りとどろく！こんな太陽の光を浴びながら、眼中を夜が転げまわる。・・・心臓が・・・手足が・・・

人々はどこへ行くのか、戦闘へ？俺は弱者だ！撃て。俺を撃つのだ！さもないと俺は降伏する。臆病者たちめ！俺は自殺するのだ！馬の足元にこの身を投げ出してやる！」

「悪い血」

以後、彼の手紙には度々徴兵の通知を嫌がって気にしている文言がみられる。そののちアフリカに渡った後までも気にしている。兄のフレデリック、後は仲たがいをするのだが、彼が志願兵だったこともあって、アルチュールの兵役はしばらくは免除である。

「地獄の季節」を書き終え詩集として印刷すると、かつてのように名声を求めて配布するかと思えば、もうあまり関心はなくなったかのように何もしない。ヴェルレーヌや数人へ渡しただけである。力を出し切って疲れたのだろうか。

「六」パリよ、さらば

ある夜、ランボーが突然カルチェラタンのカフェに姿を現す。陰鬱な眼の蒼ざめた顔である。誰もが気味悪がって近寄らない。あの真面目なヴェルレーヌとその家庭を破壊した不良青年だ。自惚れて辺り構わずに一人で騒いでいた忌まわしい男だ。彼の詩はもう誰もが忘れてしまった。

彼は力を出し切った放心状態でカフェに座ったままだ。だがある時、若い一人の詩人、ジェルマン・ヌーボーが近寄ってくる。二人はロンドンへでも行こうかと相談する。ランボーは昔さ迷った都会を思い出す。もう一度立ち上がってみるか、彼は決心する。

ロッシュ村へ帰ったランボーは書き崩しや、本や、不要な手紙、気に入らない詩などを竈に投げ入れる。地獄の業火より美しい炎だ。もうパリは捨てる。大都会の喧騒と熱気が俺を待っている。

ロンドンで彼は昔書いた散文詩を清書したり、新作を加えたりしていい生活を始める。また大英博物館に通い知識を吸収し、語学の勉強も怠らない。だが金銭を稼がなくてはならないが、それはもはや彼にとってはかつての「労働」ではない。語学の家庭教師で稼ぐのが一番身に合っているが、そう沢山はない。一説によると、段ボール工場や寄宿舎の守衛、などとして働いたともある。ただ生活資金を手に入れるためのちょっとした手段に過ぎない。

まとまった詩編は今は「イルミナシオン」と呼ばれているが当時は未刊のままだった。後にヴェルレーヌに渡し発刊してくれるのを頼むがうまくいかない。

イルミナシオンは「装飾版画」とも言われている。絵画的な都市建築の空間が色鮮やかに歌われている。言葉が絵画のように連続で展開する。パリよりははるかに進んだ近代大都会、ロンドンの時空を超えた広がりの中に、また彼独特の美の世界も忘れない。そして注目すべきは、そこにはもう、かつてのような怒りや侮蔑や侮蔑の言葉で描いた束縛された労働者や貧者や黒人は姿を消してしまった。ただ三篇の詩があるだけだ。それはむしろ郷愁をもって語られている。

「おお、二月のあの暖かい朝。時ならぬ南の訪れが、私たちの赤貧の日々の愚かしい思い出、若い私たちの窮乏を蘇らせた。

・・・・・・・・・・・・・・・

街はその煙と生業によるざわめきとで、私たちの道行をはるかに遠くまで追ってきた。おお、別世界よ、空と緑陰に恵まれた住まいよ!南の訪れが、子供の頃の惨めな出来事や夏の日の絶望や、いつでも運命によって遠ざけてきた恐るべき量と力と知識を私に思い起こさせるのだ。」

「労働者たち」

「あわれな兄貴だ!あいつのおかげで、一体どれほどの不眠の夜を過ごしたことか!

・・・・・・・・・・・・・・・

確かに俺は誠心誠意をもって彼を太陽の息子としての原初の状態に戻してやろうと約束していたのだ。—そして二人は洞窟の酒と街道の堅パンとで身を養いながらさ迷い歩いていた。」

「放浪者たち」

「日々季節、また生あるものたちや国々を遥か後にして、海と北極の花々が織りなす絹の上の、血を滴らせる肉の旗・・・雄々しさを鼓舞する古めかしいファンファーレから立ち直り、それは今でも俺たちの心と頭を攻め立てるのだが—昔の暗殺者たちから遠く離れて、甘美さよ!」

「野蛮人」

「藍色の海峡がオシアンの海に至るまで、葡萄酒色やオレンジの空に洗われた薔薇色やオレンジ色の砂の上に、水晶の大通りが立ち上がって交差したかと思うと、そこはたちまち八百屋で身を養う貧しい家族らによって居住される。豊かなものは何一つない。都市だ!」

「首都の景観」

貧しい家族、といいながら大都会の中の一つの風景として気持ちを込めて描いている。

あと「都市」「いくつもの都市」「公共のものである・・

・」「岬」などこの都市を謳いあげる詩が連なる。鉄とガラスが象徴する近代都市を透明感のある言葉で表現している。そこに虐げられた労働者や貧しい人々の姿は見えない。

ただこの都会の大空虚の中でも、彼の美への探求は途絶えない。「おとぎ話」「美へのうごめき」「花」「卑俗な夜想曲」「夜明け」「精霊」など美しい散文詩が続くが、それは読むしかないのでここでは省略する。

ただ一節だけ揚げるとすれば

「巨大な青い目と雪の体形とを備えた神のように、海と空は、大理石のテラスへと、若くて豊満な薔薇の群れを引き寄せる。」

「花」

この行を後のカミュは自分の日記に書き写している。

ジェルマン・ヌーボーがフランスへ帰った後、彼は母親と妹ヴィタリーをロンドンに呼び大都会に驚く妹を案内する。大英博物館、地下鉄、セントポール寺院のミサ。可愛い妹である。農繁期に手伝いもせず納屋に籠って詩を書いていたアルチュールを擁護してくれた妹である。しかしこれで満足する彼ではない。何かしようとする時に突然の出来事がやってくる。彼は二十歳になった。徴兵の通知が来る。十二月彼は慌ててシャルルビルに帰る。徒刑囚のように怖れていた本当の「労働」をつきつけられたのだ。

しかし彼は救われた。年が明けて役所に掛け合うと、兄のフレデリックが志願兵だったので家族は今のところ免除されるということだった。

彼の本当の放浪はこのころから始まった。ドイツで家庭教師をしたりするが、彼には南方が向いているのだろうか。アルプスを越えミラノ、マルセイユまで足を延ばす。目的はない。ただ足が動くのだ。

余談だが、アルプスの雪に埋もれながら苦労して歩いていたその頃、ディジョンでは父のランボー大尉が亡くなった。彼は何か霊感を得ただろうか。

この頃に書かれたという詩が残っている。多分彼の最後の詩だろう。

「夜の兵隊部屋」という詩で、得体のしれない兵士たちが喋りながらチーズを噛んでいる。不思議な詩である。まだ抜けきれない徴兵の不安を描いている。

彼の放浪がいよいよひどくなってくる。何度も出かけては病気や日射病で倒れ挫折する。挫折と言っても目的がある旅ではない。ただ放浪するのだ。彼は何を求めて歩き回るのか。今でこそ言えるが、彼は己の「存在」を求めてさ迷ったともいえる。自分を定義付けてくれるもの、神以外に自分の存在を認めてくれるもの、どこにそれはあるのか。歩くこと、それが彼にとっての「労働」ということに気が付かないのか。なんという、虚しい「労働」する「存在」であろうか。

また気が変わったのか、バカロレア「大学入試資格」の勉強に取り掛かったりする。

　しかし彼はマルセイユで、スペインのカルロス党の軍に志願する。自国の兵役を嫌い、そのあまりさらに南へと下って「労働」から逃げるように他国の軍へ志願するのだろうか。結局は願いは叶わず国に帰る。

　その夏、家族はパリに滞在する。長い患いのヴィタリーの病気の検査である。彼女は知らなかったが、その病気はもう助からないと言われていた。アルチュールは覚悟しなければならなかった。

「・・・昨年は、お兄さんのおかげでロンドンにも行った。明日からはパリ、うれしい」文才のあった彼女はずっと日記をつけていたが、それがここで終わっている。

　十二月ヴィタリーはシャルルビルの家で亡くなる。

「もうすぐクリスマスだ。もう何年も教会へは行ったことはない。しかしヴィタリーの具合が良ければその時は自分が抱いてでもミサに行こう。妹はミサが好きだった。昔は幼いヴィタリーをよく抱き上げたものだった。冬の寒い朝、よちよち歩きの彼女は寝巻のまま俺のベッドに飛び込んできたものだった。アルにいちゃん、アルにいちゃん、とまめらない口で俺をいつも呼んだ。そして俺に抱かれるのが好きだった。暖めてやるとまた眠った。
・・・・・・・・・・・・・・
翌日からヴィタリーは熱を出した。一週間も熱にうなされて死んだ。人形のような小さな美しい死に化粧だった。組み合わされた指は蝋燭のように細く冷たかった。アルチュールは慟哭した。」

小説「闇の中の異端児」より

彼の詩はいつも予言的である。十五歳の頃書いた詩、「オフィーリア」は花々に包まれて死んだ彼女が川を流れていくものだった。まるでこの世の「存在」とも言えない美しいというだけの「存在」が夢の空間を流れていくのだ。

ヴィタリーが死んだ部屋からは綺麗なムーズ川の静かな流れが見える。彼は自分の詩の予言を憎んだ。生きるということは、夢うつつの存在にすぎないのか。そして儚く消えて流れていく。教会のお祈りが好きだった妹、一番彼が愛した妹、ヴィタリー。

　俺の詩に何か価値があるのか。意味があるのか。傷つきながら全身で戦った俺の詩が今は虚しい。もう詩は捨てる。ムーズ川の川岸の木々が木枯らしに揺れている。またべと雪が降るだろう。

「俺は冬を怖れる。なぜならそれは慰安の季節だからだ。」

「別れ」地獄の季節より

慰安とはただの休息ではない。この時彼はものを書く詩人

として敗北した。

「七」詩を捨ててしまった

妹の死後、頭髪を剃って丸めて、異様な表情になったアルチュールが没頭したのが音楽だった。ピアノを借り練習した。音符を読み解きながら音に浸るのは、虚ろな気持ちと哀しみを忘れさせてくれた。また語学の勉強は休まず続けた。異文化の言葉は新しい世界への扉だった。

暖かくなるとやはり足が疼いた。歩かねばならなかった。彼はウイーンに現れる。しかし辻馬車の御者に身ぐるみはがれる。格闘するが地面に組み伏せられてしまい気を失う。地面の土に顔を押さえつけられて、彼は怒りよりも力を失った虚しい悲しみの方が多かった。

ベルギー、オランダと歩いた彼は、ロッテルダムでオランダの外人部隊に入隊する。契約金を稼いで途中で脱走する計画、そしてただの冒険旅行だとでも思っていたのだという説もある。行先はスマトラ島のジャワで現地の暴動を鎮圧することだった。

兵役は束縛された「労働」である。しかし詩を捨て、妹を失った悲しみに浸っている時、なにも考えず、ただ「労働」するだけという意味で彼は自らを解放したかのようにも見える。国、すなわち権力に肉体を提供して、一個の肉体として存在する、それはむしろ救いだった。

悲しみに満ちた自由、解放だ。

「どこでもいい。感情を、思い出を捨てるところへ。ただ自分の肉体を使い、酷使されてただ眠るだけの生へ。・・・それは無気力、惨めさというものでなく、むしろ一種の力強さというべきものではないか。もっと己に与えられる外部からの強力な力が欲しい。俺の意識をすべて奪い去るような、俺の感情を根こそぎ取り去るような。」

小説「闇の中の異端児」

そして一か月足らずで彼は脱走する。蒸し暑いジャングルの中を何日も彷徨う。夜は恐怖の闇に潜む。

「どこへ脱出しようとしているのか。また怠惰な平穏さの中か。どこから逃げるのか。なぜ自分はまだこうして生きようと するのか。生きねばならないのか。肉体への執着のためか。頭は、口は、もう言葉は忘れてしまった。これ以上もっと虚しい日々を続けることに努力をしなければならない。その事が虚しさと悲しみを忘れさせてくれる。」

小説「闇の中の異端児」

帰ってきた彼は今度はアメリカ海軍に志願する。これも叶

わなかった。また曲芸団に雇われたりする。そこで会計の仕事をしながら、彼は次第に金への執着に目覚めていく。

長旅をしては国に帰ってきて、また旅に出る。一攫千金を狙う計画がボンヤリであるが膨らんでくる。そしてついに彼は地中海のキプロス島に姿を現す。

「八」労働者ランボー

このころから家族への手紙が多くみられる。住んでいるところ、仕事の報告、欲しいものの依頼である。金を稼ぐのに彼は仕事を厭わない。労働に目覚めたと言って過言ではない。

「僕がここで「キプロス」で仕事についてから二か月になります。僕は海岸の砂漠にある石切り場で監督をしています。運河も作っています。会社の汽船に石を積む込ませる仕事もあります。石灰を焼く窯、煉瓦を焼く窯もあります。一番近い村まで歩いて一時間です。

・・・・・・・・・・・・

僕は相変わらず石切り場の責任者でダイナマイトを仕掛けて爆破し、石を切り出しています。現地の人夫達と何度か喧嘩をしました。それで武器も必要です。」

母宛　「キプロスよりの手紙」一八七九年

一度は現地の人夫と揉めて煉瓦を顔に投げつけ殺してしまったこともある、と一人の研究者は言う。

ここで僕には一つの彼のイメージが沸き起こる。そしてその真実、その美しさが激しく僕の胸を打つ。

二十五歳、身長一メートル七七センチ、深い青の瞳はいまは鋼鉄のように灰色になり、頭髪と髭は石粉にまみれた男。そして紺碧の地中海の輝きに純白の大理石が照り映え、そこに立ちつくすランボー。彼は真の労働者になった。神から存在の証拠として与えられた「労働」ではなく、解放された自由な労働者だ。この海と白亜の山、それを照らす太陽が俺の絶対の神だ。それは俺に自由な労働を課してくれる。俺は一個の自由な「存在」だ。対価は金と鍛えられる肉体である。

その後一度国に戻るが再びキプロスに姿を現す。

「一か月ほど前にまたキプロスにやって来ました。前の雇い主は破産していました。それでもまた仕事を見つけました。キプロス最高の山「二千メートル」、トロードスの頂上に総督用の公邸を建築中ですが、僕はその工事監督です。」

「キプロスよりの手紙」一八八〇年
アルチュール・ランボー二十五歳

彼は得意になって、労働の誇りと金を稼ぐ希望を語っている。この手紙以降、再びフランスの地を踏むのは十一年後の彼の瀬死の時である。

「九」労働とは、しかし・・・

西暦二〇一〇年四月、新聞はパリ十八区の二人の本屋が蚤の市で発見した一枚の写真を報じた。赤茶けた写真はホテルのテラスの五人の男と一人の女性を写している。逞しい商人たちの間で、一人の若者がやや不安そうな顔をしている。それが三十代のアルチュール・ランボーだと、二年の鑑定の結果証明された。場所はアラビア半島南端のイエメン共和国のアデン。ホテルの名前は奇しくも「ユニヴェール」である。

この十年前、彼はシャルルビルの駅前のカフェ「ユニヴェール」に終日座って詩を書き、パリへ行く汽車を見ていた。それは詩の世界への旅の華やかな出発点だった。

そしてこのアデンの「ユニヴェール」は労働者として泥沼に足を絡めとられ、地獄を彷徨う死への出発点だった。

アデンで彼はある商社に四年ほど勤める。エチオピアのハラルに商売に出かけたりする。待遇はそんなに悪くない。母に稼ぎを送ったりする。手紙が多くなる。月に二度の時もある手紙には、仕事の報告や現地の様子、仕事に役立つ夥しい数の本の依頼、新年の挨拶もある。カメラを送ってくれるように頼んだりする。

「僕はここで望める限りの最良の状態にあります。社は月に数十万フランの取引をしています。社員は僕一人で何もかも僕の手を通すので、今はすっかり珈琲商売に通暁しています。所長は絶対的な信頼を置いてくれますが、給料は低いです。・・・もう二百フランは貯めました。家の方はどうですか。取り入れは済みましたか？

・・・

ハラルにも時々出張する。
しかし何事もそううまくは行かない。取引上の不成立や損害などは諦めもつくが、理屈の通らない野蛮な現地人とのトラブル、裏切り、盗難、暴力沙汰には悩まされる。殴られる、命の危険にもさらされる。教養のある友人もいない。公的機関との交渉も思うがままには行かず、母国との連絡も度々不通だが、今は家族との手紙だけが、時々母親と喧嘩はするが、やはり楽しみだ。だんだん愚痴も多くなっていく。

ハラルは標高一七〇〇メートルの高原の街で城壁に囲まれたイスラムの聖地である。ある旅行者の一文では、

「豊かに生い茂ったコーヒー園やバナナ園を通り抜けた時、旅行者の眼に飛び込んでくるのは都市の赤茶色に燃えているような外観であり、焦げ茶色の横にまっすぐに伸びた家々の列であり、その単調さを壊す三本の回教寺院の尖塔と、ところどころに立っている痩せた無花果の木である。それらの眺めはこの街に夢幻的な趣を与え、たぐいまれなる魅力を醸しださせて、人目を惹きつける・・・」

しかし彼の眼には、悪臭に漂う穢い町、路地には物乞い，病人がうようよしている町である。

「僕は無駄な生活をしています。二千フランでも稼げばすぐに出て行きます」
イタリアの探検家「ロベッキ・ブリケッティの手記」

そして彼は度々病気になる。

「ああ、僕の方は人生というものにまるで未練はありません。僕が生きているのは疲れて生きる習慣がついているだけの事です。今後今同様にわが身を疲労させこの酷い気候の中で馬鹿げている苦しみを、わが身を養い続けるのは・・・・・・・・・・
この途方もない気候の元、この狂人じみた状況の中で、なんという情けない生活を僕は引きずっていることでしょう・・・個々の生活は全くの悪夢です.・・・」
母宛「ハラルからの手紙」一八八四年
ランボー二十九歳

しかしわれらランボーは強靭である。友人もでき、いくつかの仕事を成し遂げ、次第に自信を持ち始める。一文によると、「彼は出かける時はターバン代わりにタオルを頭に巻き、いつも服の上に赤い毛布を羽織っていた。回教徒に見られるようにという積りである。」

一攫千金を狙う時は来た。彼は三十歳を越えていた。

内戦で力をつけてきたある王との兵器の取引を計画する。兵器を仕入れ、一年に及ぶ準備期間を経て、駱駝の隊商を組んで彼は苦難の旅に出る。一人での危険な旅は半年かかる。しかし一生一代の大勝負は、相手の巧みな交渉の結果、大損をして失敗に終わる。これは仕事というより、労働というより、生涯をかけた大勝負だった。獰猛な砂漠の嵐と、過酷な日照り、大自然との闘いを克服してたどり着くが、現地の王の非情な仕打ちに負かされ，泣くにも泣けない。それでも絶望するわけにはいかないが、今度は彼も疲れ果てた。髪は薄く灰色になり、肩や腰や脚のリュウマチがさらに彼を悩ませる。それでもなぜすべてを投げ打って逃げ帰ろうとはしなかったのか。

この数年の逸話は沢山あり、数多くの手紙に残っている。具体的な著述から彼の苦難続きの仕事、もめ事、裏切り、失敗、孤独な生活を知ることができる。ただ、この僕の文は彼の伝記ではないので、ピエール・プチフィスの一文を借りてまとめてみる。

「アフリカ大陸に上陸した時、彼は四百フランの貯えを持っていて、得意であった。前途に希望に満ちた新しい生活が開かれていた。アラビア、アビシニア、地図の上の架空の地であった時、これらの国々はなんと美しかったことか・・・。しかし彼がアデン、ジブチ、ハラルの間に自分の手で織り成した蜘蛛の巣に絡めとられ、その地獄からようやく脱出できたのは、死の手に触れられることによってだった」

一八八八年、大きな仕事は諦めてハラルに居を構え貿易代理店を設立した時はもう三十四歳になっていた。それから二年余りの彼はまさに闇に蹲った一個の生きる個体になった。

彼の労働、仕事はそのまま彼の生きる事の一つの印になった。呼吸と同じになった。少年の頃、反抗し憎み侮蔑した「労働」は、パリの時代には詩集の中で生きる者の宿命として美しく昇華された。そして地獄の旅から蘇った時、「労働」は地中海の紺碧の海を見下ろす力の象徴になった。そして今の自分にとって、「労働」とは、「存在」とは何か。淡々と送る今の日々を何と呼べばいいのか。沈黙する、意味のないただの存在とでも言うべきか。

今や、ハラルの彼は小さな事務所で寝起きする、現地の商社マンとして仕事をする。現地の人間として日々を送る。

「市場が開かれる日の雑踏はエネルギーに溢れている。原色の布を纏い装身具を鳴らしながら女たちは声高に喋りながら通り過ぎる。頭に乗せた籠は野菜、肉、果物、珈琲豆などで溢れんばかりだ。女たちとすれ違うとふとといい

匂いがするが、すぐに市場の悪臭がそれを消す。半裸の子供たちが叫びながら駆け抜ける。ヤギや驢馬の糞尿を蹴散らす。広場は客と商人で隙間もない。地面に敷いた莫蓙に並べられた売り物は砂埃にまみれているが誰もかまわない。饐えたような匂いは肉の匂いか男たちの汗の匂いだ。誰もが怒鳴り合っているがそれは笑い声にも聞こえる。生乾きの毛皮が売られ、片方では羊が屠られている。別の一角では新芽の小枝が籠に山積みである。噛み続けると興奮と幻覚に浸ることができるチャットという覚醒葉である。・・・」

「輝ける闇の異端児」

「僕は相変わらず腐りきっています。僕ほどうんざりしている人間を知りません。家族もなく、知的な仕事もなく、黒人たちの真ん中で暮らすなど、惨めな限りです。その黒人たちをよくしてやろうとしても思っても、逆にこちらから出来るだけふんだくろうとします。彼らの訳の分からない言葉を繰り、彼等の汚らしい料理を食べ、怠け癖、裏切り、愚かさによって被る限りない迷惑に耐えるとは全くやりきれない。でももっと悲しいことがあります。しまいにはこうして自分が全くぼけてしまうのではないかという怖れです。

ここでは絹製品、綿製品、ガラス製品、鍋などの金物、装飾品などを輸入し首都方面に売り、珈琲、ゴム、麝香など香料、皮革、象牙、金などを輸出します。取引は多いのですが、まだ不足です。・・・

心からの挨拶を送ります。手紙をください。」

母宛「ハラルからの手紙」一八八八年八月

「僕の生活はやりきれないもので、あらゆる苦労とどうしようもない倦怠で寿命がぐんと縮まってしまいます。でもどうでもいいことです。

もっと頻繁に便りをください。」

「同　手紙」一八八八年九月

世情は国内とも事件が度々起こり不安定である。それらに翻弄されることもある。不必要な出費も損もある。初めは彼を悩ませた現地人との揉め事も、慣れてきて、それでも苦労しながら切り抜ける。また地元の人間の相談にも乗って、問題を解決してやる。ここの生活に愚痴をこぼし、嫌いながらも次第にまわりから一目置かれる立場になる。信頼のおける少ない友人もできる。

「ハラルの人たちは、いわゆる文明国と称する国々の白い二グロたちより愚鈍だとか、浅ましいということはありません。要するに同列には論じられないというただそれだけの事です。むしろこちらの連中の方が、性悪なところが少ないとさえいえるので、場合によっては感謝の念と

誠実さをはっきり示してくれることもあります。要は彼等にたいして人間らしく接することです。」

妹と母宛「ハラルからの手紙」一八九〇年二月

彼に郷愁はない。仕事の事、送金の事、頼み事などの手紙が主だが、しかししばしば結婚の話も出てくる。そして家族へ愚痴をこぼすのが多くなる。

「僕には残念ながら結婚する暇もなければ、人の結婚を見物する暇もありません。僕にはある時期が来たら仕事を離れるということができないのです。その期限がはっきりしないからなおさらです。この呪わしい国で仕事についたら、もうなかなか抜け出れません。身体は元気です。しかし、一分毎に髪が一本ずつ白くなります。この分で行くともうじき白粉刷毛のような頭になるのではないかと心配です。」

「ハラルからの手紙」一八九〇年四月

「前の手紙で結婚したいとも言いましたが、たとえ結婚してもこれまで通りに自分の思い通りに旅行したり、国外に住んだり、アフリカで生活を続けたりする自由は保持していくつもりです。ヨーロッパの気候からすっかり切り離されてしまったので、容易にはそれに適応はできないでしょう。いつかフランスへ帰るにしてもどうやってみんなと交際を取り戻したらいいでしょうか。どんな仕事が見つかるでしょうか。それに一つ、到底耐えられないものがあります。一つところにじっとしている生活です。僕の遍歴放浪の生活に一緒についてくる人を見つける必要があります。・・・

アデン、ハラルでは誰一人僕の事を悪く言う人はいないはずです。どういたしまして、僕は十年来、この地方で立派な人間として知られているんです。」

母宛「ハラルからの手紙」一八九〇年十一月十日

これはハラルの最後から二番目の手紙である。

一八八〇年、彼がフランスを出て十一年の間、一八九一年まで帰らず、マルセイユで死ぬまでの手紙は百四十六通に上る。注目すべきはこの一八九〇年の手紙である。まだ仕事をしている時、まだ人生を生き抜く意欲を失くしていない手紙だが、奇しくもこの手紙のちょうど一年後の同じ日に彼は死ぬ。当然彼はそのことは知らない。

ハラルからの最後の手紙は、翌春ハラルを出発して、アデン、マルセイユを経由する帰国の旅の苦しい報告と病院の彼の部屋の死の直前のものである。

アフリカの最後の二年間の様子を述べる。

港と都との間のハラルで彼は仕事人として一流の地位を占めている。

彼以外に、ここにはフランス人はカトリック伝道の神父が一人いるだけだが、かつてのように聖職者を忌み嫌ったりしない。あたらず触らずの付き合いだが、たまには慈善の布教団体に寄付もする。

また二十人ばかりのヨーロッパ定住人と、様々な調査隊が来るとその間の取引を結んだりする。その時は販売人、仲買人や金主となる。

商売では品物を受け取ったり引き渡したり、事務所ではそれを台帳に記入する。彼は几帳面で抜かりはない。金はたまっていく。

他に訪れてくる旅行者、商人や政治、地理調査の訪問客は絶えない。彼の家に足を止める者もいる。ハラルに行くと、ランボーという人がいる、会っておけば何かといい、という評判も流れている。その人たちを歓迎することもあり、それなりの顔と地位ができる。

事務所兼自宅にしばらくは一緒に女性も住んでいたが急に追い出してしまう。小間使いの少年も住んでいたこともある。

背は高く痩せてもう髪は白くなっている。落ちくぼんだ眼は灰色に濁っている。仕事人としては整理、思考、先見性などは優れているが、情緒不安定なところもある。上機嫌で人をからかって敵を作ることもある。時にはお道化たりする。そして鬱状態になる。

プライドは高い。あるギリシャ人の司祭と討論になって、古代ギリシャ語で打ち負かせたこともある。回教徒との言い合いでは、コーランの解釈の違いを主張して棒で叩かれ、かなりの傷を負ったりする。

理不尽な役人と住民たちの相談に乗って仲裁もしてやる。つまらぬことで刑務所に入れられたこともある。

いつもポケットに煎り栗を入れてそれが携帯食料で歩きながら齧っている。彼は控えめに生きて修道僧のようだった、という人もいる。

フランスの地理学会へ調査の原稿を送ったこともある。しかしある時フランスの雑誌社から、貴兄はサンボリストの巨匠です、と言われ，詩の投稿を頼まれたこともあるが無視してしまう。

かつての華やかなパリ時代の事は喋らない。大体において無口である。

親しい友人もできるがほんの一人か二人だ。会うときはやはり顔はほころぶ。

ハラルの街の城門は日没とともに閉まる。打楽器に合わせて踊る娼婦の嬌声や男たちの笑い声がおこるが、それもやがて消えて、静かなコーランの祈りと共に闇が訪れる。その奥から嘲笑するようなハイエナの遠吠えが聞こえて来る。月のない夜の家並みは闇に蹲ったままだ。路地の小さな家々はその区別がつかず石塀のように連なっている。路地には残飯と汚物が捨てられる。時折の雨がそれらを洗い流す。悪臭につられて入り込んできた野犬とハイエナが獲物を奪い合う。夜

中に捨てられた死人は残骸となって朝を迎える。残りは禿鷹の役目だ。

ランボーは夜はたいてい部屋に一人閉じこもっている。うす暗いランプの下で、帳簿を整理し、金を計算し、手紙を書く。酒は蜂蜜を発酵させたタッジというこの地方の酒だ。時には来訪者から貰ったワインもある。

夜は長い。ランプが消えると窓から満天の星がなだれ込んでくる。彼は手作りのハープを奏でる。シャルルビルの好きだったカフェやパリのカフェの灯が蘇る。ハッシシとワインに溺れた哄笑や悲しい妹の死が思い出されるが、それは一瞬で消える。ひと頃はピアノに熱中したこともある。美しい音と旋律が気持ちを癒す。

静寂と闇が訪れる。

かつては熱い言葉で反抗の雄叫びを挙げたこともあった。原色の言葉は荒れ狂って闇夜に舞いあがった。しかし今は何を喋る必要があろう。ただ透明な光に沈む沈黙だけが美しく力強い。

白光していく朝の太陽を賛美したこともあった。闇に輝く極彩色の幻想に溺れたこともあったが、それらも霧のように消えてしまった今は何を見る必要があるだろう。

砂漠の荒れ狂う嵐と、夜の底冷えと不気味な唸り声、それらに耐えた強靭な肉体が誇りだった。だが今は誰が、何がそれを賛美してくれるのか。俺はただの個人、肉塊、だれもが認めることのないただの存在。それでもまだ生きて行かねばならない。だが闇に居座り続ける存在はやがてすぐに誰からも忘れ去られてしまうだろう。まさに不要のものだ。

ハープの弦が切れる。明日また作りなおさねばならない。

僕はここでカミュがランボーについて書くことになった原点を述べたい。

カミュは少年時代の終わりに、突然喀血し死を間近に知る。それまで実感のなかった死に怯える。

彼は二十歳の時に、「地中海」という詩を書く。太陽の熱気に燃え上がる地中海、数々のロマンを秘めて張りつめる地中海、残虐な殺戮の神話の血を流した地中海、誇りと勇気に満ちた歴史の地中海、そしてただ紺碧に輝く地中海。その前で人間は小さく、ただ日々を送り、虚しい些細な日常を喜び、そして死んで行く。

カミュは地中海の前で明るく死んで行く日常の人間と、闇に蹲って沈黙に沈んでいるランボーの姿を、重ねて見ていた。彼が何時、何歳の時にランボーを読み、彼の闇を知ったか僕は知らない。しかし彼はムルソーの中にランボーの面影を書いた。

人は地中海の前で、自分の存在を信じて生きている。だが意識してもしなくても夜中にふと目覚める時、自分の存在を不思議なものと思い、なぜ存在するのかと疑問に感じる。不安に襲われる。それをカミュは存在の反抗と呼ぶ。不条理と

名付けた。
　ランボーはずっと夜中に生きて来た。意識してもしなくても、考えることもなく、疑問が身についていた。彼の詩はそれがテーマだった。そして詩を捨てたあとは、労働が存在の疑問と戦う存在の証だった。労働、日々の些細な仕事が、生きる証だった。黙々と仕事を続けていく事が虚しい日々を生きる事だった。それは敗北することが明白な反抗であった。
　彼が生きて、死んで行く様は、すべての人間の姿だ、とカミュは言う。
　彼が生きている、そのものが詩であった。彼の沈黙はもはや書く必要のない詩であった。

「十」帰還

　脚の痛みにうなされた二月の手紙がハラルからの最後の手紙になる。政情不安，飢饉、病気の苦しみだけでなく、いまだに兵役の心配もしている。

「僕の健康はかんばしくありません。右脚に静脈瘤ができてひどく痛みます。この憂鬱な国で苦労を重ねた揚げ句に、得るものがこれなんですからね。・・・呪われた脚の痛みで二週間くらい一睡もしていないのです。とくに夜がいけません・・・静脈瘤の長靴下、それも痩せた長い脚用を送ってもらえればうれしいのですが・・・
粗末な食事、不健康な住居、薄着、あらゆる種類の心労、倦怠、浅ましい、愚鈍な黒人相手のひっきりなしの腹立ち・・・ところで僕の兵役関係がどうなっているか、お知らせください。」

母宛「ハラルからの最後の手紙」一八九一年二月

　帰国への出発の四月から、その年の十一月に死ぬまでの手紙は十四通に上る。ほぼ七か月の間に長い手紙もある。苦労した旅程や病状や入院や仕事の手紙である。ほとんどが、妹と母親宛だ。痛み、悲しみ、不安、愚痴、金の心配、が満載である。読むにいたたまれない。

「容体はひどく、悪いです。・・・僕は骸骨同然になりました。・・・国立パリ割引銀行に振り出された三万六千八百万フランの手形をここで引き換えねばならないのですが、誰も頼める人がいません。手元にお金はあるのですが、それを見張っていることさえできないのです。なんという、悲惨な人生！」

母宛「マルセイユ　コンセプシオン病院より」
一八九一年五月

「切断したあたり、つまり残っている部分に依然として激しい痛みを感じます。どういう風に片付くものか見当もつきません。とにかく僕はすべてを諦めきっています。な

んて、僕はついていないんだ。」

妹宛「同上」　六月十七日

「僕はと言えば、昼も夜も泣き暮らしています。僕は生ける屍です。生涯のかたわになりました。・・・いろいろ心配事が多くて気が狂いそうです。・・・つまるところ我々の人生は惨めです。それなのになぜ生きているのだろう。・・・・」

妹宛「同上」　六月二十三日

「ところで、なんと怖ろしい話ですか。またしても兵役の話など、どうしてですか。・・・僕が兵役忌避者のリストに入っているとか・・・こんなに苦しんでいるのに、豚箱行き！死んだほうがましだ。

・・・・

へ帰りたいと、譫言のように駄々をこねる。仕方なしに妹が付き添いマルセイユまでたどり着くが、手術をしたコンセプシオン病院で煩悶の末に死ぬ。三十七歳

一八九一年十一月十日午前十時　全身転移癌。

死の前日、朦朧とした意識のなかで、象牙一本、象牙二本、象牙三本、象牙四本、と述べたものがあるが、妹に口述筆記させて投函されていない。

ここでは沢山の手紙から抜き書きしたが、七か月にわたる苦しみ、それも肉体の苦しみに悶える彼を読むことができる。カミュの言う、情熱と真実の姿よりも、肉体の痛さに煩悶する一個の存在が、そこにある。心の痛みは何か頼るものがあると和らぐことがある。しかし肉体の痛みは決して消えない。人間の肉体、存在の痛みは救いようがない。痛みという束縛に縛られ、死んで行くものの、誰でもの同じ姿だ。心は消える肉体の中に消滅する。苦痛と苦悩のうちに不条理に目覚める。ただ虚しく死んで行く。反抗し闘いの日々を送ったものはすべて敗北する。

耐えられない苦痛のうちに、彼は神の実在を信じ、救いを求めたのだろうか。死に直面して彼の譫言を妹が記しているが、正確なものはわからない。救いを求めて祈っても、応えてくれない神に憎悪の言葉を投げかけたとしてもどちらにしても神の実在を認めたことになる。臨終に訪れた司祭は、イザベルに、あなたのお兄さんは偉大な信仰をお持ちでした、と語ったという。神の存在を身をもって信じておられました、・・・。

葬儀は故郷シャルルビルのかつて彼が憎んだ教会で行われた。熱心なカトリック信者だった母親は、最上級の豪華な葬儀を依頼した。しかし参列者は母と妹二人のみだった。そして母親が依頼して聖堂に鳴り響いたオルガンは「怒りの日」という曲だった。

誰の、何に対する怒りなのか。神が反抗する存在に怒っているのか。それとも反抗する存在が、神に怒りをぶつけているのか。神が不逞の存在アルチュール・ランボーに怒っているのか、それともアルチュール・ランボーの存在が反抗することで怒りを神にぶつけているのか。

Le 22 fevrier 2022

アルチュール・ランボー小論

「一」賢治とカミュとランボー　「海２６号」

本文中「　」は引用　訳　宇佐美斉　金子光晴

参考文献　ピエールプチフス　宇佐美　金子「全集」

「輝ける闇の異端児」井本元義